22　　かなわぬ恋の果て　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　副詞①

水の尾の帝の御時、左大弁の女、弁の御息所とていますかりけるを、帝御髪おろし給うて後にひとりいますかりけるを、在中将忍びて通ひけり。中将病重くアしてわづらひける、もとの妻どももあり、これイはいと忍びてあることなれば、Ａえ行きもとぶらひ給はず、忍び忍びになａむＢとぶらひけること日々にありけり。さるに問はぬ日ウなむありける。中将のもとより、

　　つれづれといとど心エのわびしきに今日は問はずて暮らしてｂむとや

とておこせたり。Ｃ弱くなりにたりとていといたくＤ泣きさわぎて、返りごとなどもせｃむとするほどにＥ死にけりと聞きて、いとＦいみじかりけり。

【本文チェック】

①　ア～エの助詞の種類を（　）に書きなさい。

ア（　　　　助詞）　イ（　　　　助詞）

ウ（　　　　助詞）　エ（　　　　助詞）

②□ａ～ｃの「む」のうち、文法的説明の異なるものを一つ選び、記号に〇をつけなさい。

　ａ・ｂ・ｃ

③傍線部Ａ～Ｆの主語を、ア御息所・イ中将から選び、〔　〕に記号で書きなさい。

Ａ〔　　　〕　Ｂ〔　　　〕　Ｃ〔　　　〕

Ｄ〔　　　〕　Ｅ〔　　　〕　Ｆ〔　　　〕

【語彙力 ✚】

問１　次の語句の意味について、空欄を埋めよ。＊〔数字〕はノート本冊での本文の行数を表す。

１　御髪おろす〔１〕 （　　　　　　　）

２　わづらふ〔２〕　 ①悩む

②（　　　　　　　　）

問２　次の傍線部の意味として最も適当なものを選べ。

１　国のまうでとぶらふにも、え起きあがりたまはで、船底にしたまへり。

（竹取物語）

ア　し　　　イ　見舞っ

ウ　返事をし　　エ　供養し

（　　　）

２　女、かへでのをひろはせて、歌をよみて、書きつけておこせたり。

（伊勢物語）

ア　片付け　　イ　物思いにふけっ

ウ　よこし　　エ　口ずさん

（　　　）

【文法力 ✚】

問３　次の各文から副詞を（　）の数だけ抜き出せ。

１　なほ悲しきにたへずして、（土佐日記）

（　　　　　　）

２　夜はすでにほのぼのと明けゆけど、（平家物語）

（　　　　　　）（　　　　　　）

３　まことにさにこそ候ひけれ。（徒然草）

（　　　　　　）（　　　　　　）

問４　次の傍線部の副詞が修飾する語を抜き出せ。

１　人の心はなほうたておぼゆれ。（徒然草）

（　　　　　　　）

２　の顔をつとまもらへたるこそ、（枕草子）

（　　　　　　　）

３　なぞの犬のかく久しう鳴くにかあらむ。（枕草子）

（　　　　　　　）

問５　次の各文から副詞を抜き出し、その副詞を現代語訳せよ。

１　谷の底に鳥の居るやうに、やをら落ちにければ、（宇治拾遺物語）

（　　　　　　　・　　　　　　　）

２　はむげにいやしくこそなりゆくめれ。（徒然草）

（　　　　　　　・　　　　　　　）

３　その沢にかきつばたいとおもしろく咲きたり。（伊勢物語）

（　　　　　　　・　　　　　　　）

４　人々声あまたして、馬の音聞こゆ。（源氏物語）

（　　　　　　　・　　　　　　　）

【古典常識】

問６　『大和物語』の説明として最も適当なものを、次から一つ選べ。

ア　約四十の小話からなる平安中期の歌物語で、平を主人公とする。

イ　平安末期の作品で、古歌やいにしえの歌人にまつわる逸話を語る。

ウ　貴族から庶民までが広く登場し、説話的要素も含む歌物語である。

エ　『日記』ともいい、『新古今集』以下の勅撰集に九首が採られた。

（　　　）

【解答】

【本文チェック】

①　ア＝接続　イ＝係　ウ＝係　エ＝格

②　ａ

③　Ａ＝ア　Ｂ＝ア　Ｃ＝イ　Ｄ＝ア　Ｅ＝イ　Ｆ＝ア

問１　１＝出家する　２＝病気になる

問２　１＝イ　２＝ウ

問３　１＝なほ　２＝すでに・ほのぼのと　３＝まことに・さ

問４　１＝おぼゆれ　２＝まもらへ　３＝鳴く

問５　１＝やをら・静かに　２＝むげに・むやみに

　　　３＝いと・たいへん　４＝あまた・たくさん

問６　ウ

【現代語訳】

問２　１　国司が参上して見舞っても、起き上がることができなさらないで、船底に寝ていらっしゃった。

２　女は、楓の初紅葉を拾わせて、歌を詠んで、（それに）書きつけてよこした。

問３　１　さらにいっそう悲しさにこらえきれないで、

２　夜はもうほのかに明けていくけれど、

３　本当にそうでございました。

問４　１　人の心がやはり情けなく思われる。

２　（説経をする）僧の顔をじっと見つめているのにこそ、

３　どこの犬がこのように長い間鳴くのであろうか。

問５　１　谷の底に鳥がとまるように、静かに落ちたので、

２　現代風な物事はむやみに下品になっていくようだ。

３　その沢にかきつばた（の花）がたいへん美しく咲いている。

４　人々の声がたくさんして、馬のいななきが聞こえてくる。